

特別編

江戸庶民の年中行事再現

江東区深川江戸資料館

当館の常設展示室・江戸深川の町並みでは、江戸時代後期の庶民の暮らしの中に身近にあった代表的な6つの年中行事（正月・初午・雛節句・端午の節句・七夕・月見飾り）を四季折々に再現しています。今号では、その展示内容をご紹介します。

1. 江戸庶民の年中行事

(1) 年中行事の要素

江戸時代の一年のサイクルは、農耕儀礼を中心にした旧暦（太陰太陽暦）で表され、月の満ち欠けと共に日々の暮らしがありました。旧暦は現在の新暦よりも約1ヶ月遅れの目安になります。

季節の年中行事は五節句を中心に、寺社仏閣の縁日など人々の暮らしに欠かせない様々な行事がありました。日本古来の年中行事（歳事記・歳時記）は農作業を行う季節の節目の行事としての意味合いが中心でしたが、中国の伝説や地域の風習など、多種多様な要素が交わり、現在まで伝承されています。

(2) 江戸の年中行事

江戸では徳川將軍家の城下町である武都として、公家から武家に伝わった儀礼を中心にした年中行事が、武家の暮らしを支えた町人や職人にまで広がりました。様々な階層の人々が集まる複合的な大都市である江戸の年中行事は本来の農耕儀礼の性格から離れ、厄除け、商売繁盛など、日常の暮らしにつながる現世利益の願いを懸けたことが大きな特色です。

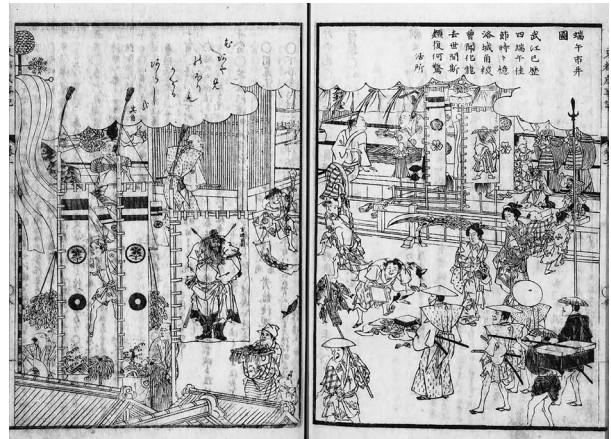
2. 深川江戸資料館の年中行事再現

(1) 再現設定

当館の年中行事は展示室の設定である「江戸時代後期天保年間（1840～1844）頃の深川佐賀町の庶民の暮らし」を念頭に、当時深川に暮らした人々の身近にあった主な行事を想定し、同時代の史料を参考に再現しています。

(2) 同時代の記録者 齋藤月岑

年中行事を楽しむ江戸人の代表が齋藤月岑（文化元年〈1804〉～明治11年〈1878〉）です。月岑は神田雉子町の草分名主である旧家に生まれました。月岑は町名主の役目として、節句ごとの將軍家への御礼あいさつ、寺社の祭りや出開帳の運営など、江戸の



端午市井図（「東都歳事記」所収） 齋藤月岑著・長谷川雪旦画
この絵を参考に、端午の節句飾りを展示しています。

代表的な年中行事に公務で関わったのみならず、多忙な仕事の合間を縫い江戸津々浦々の行事に自ら足を運び、詳細な記録「東都歳事記」（天保9年〈1838〉）を著しました。「齋藤月岑日記」には亀戸天神妙義社の初卯詣、富岡八幡宮の祭礼など、江東区方面にも訪れたことを記し、「東都歳事記」の中で紹介しています。また初代歌川広重は「名所江戸百景」（安政3年〈1856〉～5年〈1858〉）の中で江戸の年中行事を描く助言を月岑から得ていました。

当館の年中行事はこれらの史料をはじめ、喜田川守貞著「守貞謄稿」（天保8年〈1837〉～嘉永6年〈1853〉）、菊池貴一郎（四代歌川広重）著「絵本江戸風俗往来」（明治38年〈1905〉）などを参考に再現しています。

3. 江戸深川の町並みを彩る6つの年中行事

(1) 正月飾り

正月は歳年神を迎える、一年のはじまりを告げる行事です。大店や各家の玄関の小さな松飾り、軒飾りの松や竹の清々しい香りが町並みを包みます。大店多田屋の大きな松飾りや船宿の鏡餅は、明治生まれで地元・清澄で活躍した鳶の頭に伝わった大店飾りを再現しています。雑煮は江戸の特色の具材（すまし汁・角餅・里芋・小松菜・大根）で祝います。

(2) 初午

初午は二月最初の午の日に町中で祝う稲荷社の祭

礼で、子どもたちが主人公の祭りです。「伊勢屋稲荷に犬の糞」と詠まれるほど、江戸の町には長屋の路地裏に至るまで稲荷が祀られ、人々に一番身近な神様でした。長屋の小さな稲荷の祠と町中に、当時の駄洒落を書いた地口行灯を飾ります。稲荷には油揚げを供え、子どもたちは太鼓を鳴らして町を巡りました。

(3) 雛節句

三月上旬の巳の日に人形に穢れを移し水に流す上巳の節句と雛遊がつながり、女の子の節句となりました。展示室では、春米屋に古今雛、船宿に土雛、長屋おしづには箆筒を雛壇に見立て、紙雛を飾ります。土雛は江戸時代の今戸焼きの雛を再現しています。大きな菱餅や蓬餅、さらに深川洲崎で採れた蛤やサザエを供えます。

(4) 端午の節句

旧暦五月五日は、夏を迎える前の最も災厄の強い日とされ、禊の行事が行われました。季節の薬草である菖蒲を魔除け、また幟などを神を招く依代として飾りました。冑や刀が武家の勇ましさにつながるため特に江戸の武家で盛んに祝い、男子の節句として庶民にも広がりました。鯉幟、柏餅は江戸特有のものです。

(5) 七夕飾り

人々が星に願いをかける七夕。七夕は古代中国の織女・牽牛の夫婦星の伝説と、日本古来の盆を迎える前の祓いの行事が主な起源です。江戸の七夕は

武家から庶民の家まで、願い事を書いた五色の短冊、縁起物の大福帳、大判、文字の上達を願う筆、季節の供物である西瓜などを色とりどりに笹竹に飾り、願いが叶うよう天高く掲げました。

(6) 月見飾り～十五夜・十三夜～

旧暦八月十五日は十五夜です。この月は一年でも美しく輝き「中秋の名月」といいます。また旧暦九月十三日の十三夜は「後の月」と呼ばれ、江戸では両方の月見を欠かしませんでした。共に月の信仰、秋の収穫祭など様々ないわれがあります。展示室では「絵本江戸風俗往来」を参考に、直径約10cmの月見団子と一緒に里芋、栗、ススキなどの季節の供物や植物を飾ります。

このように当時の人々は年中行事で季節を楽しみ、様々な願いを託し、暮らしの中の大きな拠り所としました。深川江戸資料館の江戸庶民の年中行事再現を通して当時の人々の想いに触れてください。

(主な参考文献)






西山松之助編『江戸町人の研究』(第4巻)

(吉川弘文館/1975)

宮田登『江戸歳時記』(吉川弘文館/2007)

赤坂治績『浮世絵で読む、江戸の四季とならわし』

(NHK出版/2014)

<p>正月(大店の松飾り)</p> 	<p>初午(稲荷の祭礼)</p> 	<p>雛節句(長屋の紙雛)</p> 
<p>端午の節句(大店の幟)</p> 	<p>七夕(町中の笹飾り)</p> 	<p>月見(船宿の供え物)</p> 